

A・MUSEUM

vol.95
[2018.6.15]



ミュージアムパーク
茨城県自然博物館



フクレミカンの花



フクレミカンの果実

くだものと花

私たちの食卓に潤いを与えてくれる果物。春はイチゴ、夏はモモやスイカ、秋はナシやカキ、冬はミカンのように、多くの果物は、その果実をつける季節が決まっています。普段見ることは少ないですが、果物の「花」も季節に合わせて美しい姿を見せてくれます。筑波山の中腹（標高170m～270m付近）では、冬でも暖かくなる気候を利用し、フクレミカンが栽培されています。小ぶりの黄色の果実が収穫できるのは11月頃ですが、その約半年前の5月中旬に白い可憐な花を咲かせ、あたり一面に甘くさわやかな花の香りを漂わせます。10月から開催する第73回企画展「くだもの展」では、このような果物の花もたくさん紹介していきます。

(資料課 豊島文夫)

第72回
企画展

火山列島・日本 一大地との語らい

Volcanic Activities on the Islands of Japan

平成の時代があと1年を切りましたが、新聞などのアンケートによると、平成は大地震や火山噴火、洪水など自然災害がとても多かった時代という印象が強いそうです。特に最近、活発な火山活動についての記事を多く見かけます。2014年の紅葉シーズンに突然噴火した御嶽山の大災害は、衝撃的な映像とともに記憶に新しいことと思います。その後も阿蘇山や霧島山、口永良部島などが噴火し、身近な観光地でもある箱根山でも小規模な噴火が起こるなど、日本列島の火山が活動期に入ったのではないかともいわれています。

現在、日本の活火山は111を数え、世界の活火山の約7%が日本にあります。このため火山は私たちにとって身近な存在です。火山は風光明媚で変化に富んだ景勝地を創り出し、観光地になっています。その荒々しい山並みは登山やハイキングの対象になり、山麓に湧き出す温泉には多くの人々が訪れます。また、火山から離れた地域でも、長年にわたり降り積もった火山灰が畑地の土壌となって私たちに豊かな恵みをもたらしています。その一方で、火山がひとたび噴火すると、私たちは地球が活着していることを体感します。火山の噴火はときには大災害をもたらすこともあり、大自然に畏怖と畏敬の念を抱かせます。

今回の企画展では、まず、日本の活火山をさまざまな噴火現象とともに取りあげます。噴火で生じる灼熱の溶岩流や飛来する火山弾・噴石、降り積もる火山灰、斜面を流れ下る火砕流などのさまざまな噴出物や、新たな火山の誕生の記録などをもとに、さまざまな火山を科学的な側面から紹介していきます。また、私たちがまだ経験したことのない超巨大噴火や、火山が私たちにもたらしているさまざまな恵み、火山噴火と生物相とのかわり、そして火山との共生などについても紹介します。

この企画展をとおして、火山列島・日本に生きる私たちが火山活動という自然現象を理解するとともに、その恵みを楽しみながら火山と共生していく道について一緒に考えていきます。(教育課 小池 渉)

展示構成

- 1 鳴動する火山
- 2 世界の火山・日本の火山
- 3 火山噴火と噴出物
- 4 火山の恵みとともに
- 5 歴史を変えた巨大噴火
- 6 破壊から生態系の回復へ
- 7 活火山とともに生きる



霧島山(新燃岳)の2011年噴火
(提供:霧島ジオパーク推進連絡協議会, 撮影:永友武治)



パン皮状火山弾(浅間山(群馬県・長野県))
(所蔵:国立科学博物館)



温泉を楽しむニホンザル(地獄谷温泉(長野県))

会 期 2018年7月7日(土)から
9月17日(月・祝)まで

※7月7日(土)は午後1時からの公開となります。
開館時間 9:30~17:00(入館は16:30まで)
休館日 毎週月曜日
(※7月16日(月), 8月13日(月), 9月17日(月)は開館し、7月17日(火)は休館となります。)

●自然講座 火山活動を探る

日 時: 7月29日(日) 13:30~15:00
講 師: 藤井敏嗣氏(山梨県富士山科学研究所)
佐野貴司氏(国立科学博物館)
場 所: 博物館映像ホール
対 象: 小学4年生以上(小学生は保護者同伴)
定 員: 280名(事前申込み・先着順)

●自然講座 火山噴火実験をしよう

日 時: 8月11日(土) 13:30~15:00
講 師: 山崎誠子氏・田中明子氏
(産業技術総合研究所地質調査総合センター)
場 所: 博物館セミナーハウス
対 象: 小学生以上(小学生は保護者同伴)
定 員: 50名(事前申込み・先着順)

●自然観察会 活火山・那須岳に行こう!

日 時: 9月9日(日) 10:00~15:00
場 所: 那須・茶臼岳(現地集合)
対 象: 小学4年生以上(小学生は保護者同伴)
定 員: 30名(事前申込み・抽選)
備 考: ロープウェイ費は個人負担となります。

企画展のテーマ決定と取材

企画展ができるまで 1

当館では自然の魅力や調査研究の成果をお伝えするため、年に3回さまざまなテーマで企画展を開催しています。企画展を楽しみにご来館くださる方も多いのではないのでしょうか。ここでは、企画展ができるまでの「裏側」を、4回シリーズで掲載します。

1回目の今回は、企画展のテーマ選びから取材までをご紹介します。企画展のテーマは、約3年前に決定します。「面白そう！行ってみたい！」と思うテーマになるように、来館するみなさんからのアンケート、職員の専門分野、博物館として伝えたいこと、タイムリーなことなどを考慮して、どんなテーマが一番よいか、職員みんなと一緒に頭を悩ませます。企画展を行う順番にも工夫が必要です。当館には動物・植物・地学の3つの研究室があるので、その3つの分野をバランス良く配置するとともに、テーマの季節性を考えて順番を決めます。なお、当館ではチーム制で企画展を制作しており、学芸系職員（学芸員と小・中・高等学校から異動してきた学芸主事）や事務系職員など計7名ほどでチームを組み、チーフを中心に、分担して企画展を制作します。内容に広がりがある展示になるように、メンバーはなるべく複数の研究室から選んでいます。次回企画展「火山列島・日本」では、噴火が動

植物に与える影響も展示するため、地学研究室だけではなく動物研究室や植物研究室の学芸系職員もメンバーに入っています。

メンバーが決まると、展示の構成を考えます。それと並行して、展示のために必要な調査と取材を行います。文献を調査することはもちろんですが、大事なのは展示する資料や写真を集めることです。当館に所蔵している資料だけでは企画展が成り立たないことがほとんどなので、全国各地に取材に行き情報を得るとともに、ほかの博物館などから資料を借りたり、資料を新しく採集、購入したり作製したりすることが必要です。例えば、2016年に行われた企画展「洞くつ探検」では、日本洞窟学会の方々の協力を得て、公開されていない場所を含む多数の洞くつを調査し、全身泥まみれになりながら生きものや岩石を採集しました。ときには、海外から資料を借用したり海外調査に行ったりすることもあります。

企画展づくりには苦労もありますが、企画展を開催する度に、博物館の資料が充実します。そして、関連機関や人との輪がどんどん広がっていくとともに、学芸系職員もレベルアップしていきます。

（企画課 鶴沢美穂子）



企画展「くだもの展」の打ち合わせの様子



企画展「洞くつ探検」の調査の様子（右側が筆者）

火山

2011年の東北地方太平洋沖地震は東北地方に未曾有の被害をもたらしました。火山の噴火は地震とともに怖いものです。最近の噴火としては、雲仙普賢岳、御嶽山、草津白根山、霧島山（新燃岳や硫黄山など）があります。大きな人的被害をもたらした雲仙普賢岳や御嶽山が大きな噴火と思われがちですが、実は、2011年の新燃岳の噴火の方が規模としては大きいものでした。

歴史から見ると富士山の1707年の

宝永噴火では関東地域に大きな被害がありました。さらに古い縄文時代には、九州南部において鬼界カルデラが噴火し、九州だけでなく関東にも大量の火山灰が積まりました。

それ以前にも阿蘇カルデラや始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の巨大噴火によって、日本中に火山灰が降り積もっています。次回の企画展「火山列島・日本」で、少しでも火山の知識と噴火への備えを知ってもらえればと思います。

館長コラム by director YOKOYAMA



イラスト：芳尾歩美（ミュージアムコンパニオン）

第Ⅲ期総合調査がスタートしました！

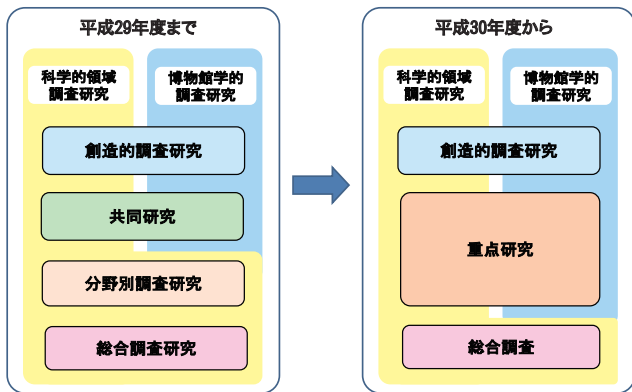
研究報告 1

当館では、開館以来、学術調査研究活動を研究のねらいや手法により、創造的調査研究、共同研究、分野別調査研究、総合調査研究の4つに分けて実施してきました。しかし、調査研究をより効率的で実効性の高いものにするため、昨年度、全体の体制の見直しを行いました。

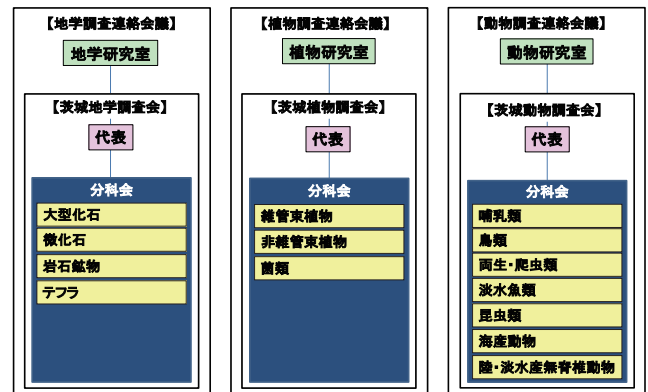
職員各自の専門性に関連したテーマに基づいて個別に行う創造的調査研究はこれまでと同様に実施していく予定ですが、ほかの調査研究活動は名称や内容が変わりました。グループで実施してきた共同研究と分野別調査研究は廃止され、新たに重点研究がスタートしました。重点研究では、茨城県の自然や当館の博物館活動に関する重要な課題や今日的な課題をテーマとします。また、総合調査研究は総合調査と名称を改め、茨城県の生物相やその変遷、地質などの地学的特性を把握するために、茨城県の自然史資料を蓄積していきます。

第Ⅲ期総合調査は調査内容も第Ⅰ期、Ⅱ期とは大きく変わりました。これまで、茨城県内を4つの地域に分けて、各々の地域を原則的に3年かけて調査し、12年間で完了するという形式をとっていましたが、今年度から3年を一区切りとして6年間で県内全域を調査

することになりました。また、調査地は県内全域を対象とし、未調査の場所や収集が不十分な分野の資料を中心に調査を実施していく予定です。植物と動物においては、茨城県のレッドリストの作成や改訂なども考慮に入れながら、調査を進めることにしています。また、今年度から、新たに茨城地学調査会、茨城植物調査会、茨城動物調査会に委託し、そこに当館の職員が加わって調査をスタートすることになりました。各分野で開催する連絡会議などを通して、情報交換を行いながら調査を進めていきます。今後、たくさん資料やデータが蓄積されることが期待されますが、これらの資料情報は当館の収蔵資料データベースに反映されるだけでなく、世界的なデータベースを構築しているGBIF（地球規模生物多様性情報機構）にも提供していきます。これらの情報は、当館のホームページのほか、国立科学博物館が運用するサイエンスミュージアムネットでも公開され、だれでも資料情報を検索して活用することができます。また、総合調査では、将来、茨城県の自然に関する目録を作成することを大きな目的としていますが、これら資料情報は、今後の茨城県の自然史研究の基礎資料として有効活用されることとなるでしょう。（資料課 池澤広美）



当館の学術調査研究の体制の変更図



当館の総合調査の新たな体制図

ヤマカガシのひみつ

2017年の夏、兵庫県で小学生の男の子が毒ヘビに咬まれて病院に運ばれた、というニュースを覚えているでしょうか？実はこのヘビ、“ヤマカガシ”といって、一部地域を除き全国的に見られる種類です。しかもその毒はマムシ、ハブを抑えて日本最強といわれています。しかし、このヘビを毒ヘビだと認識している人はほとんどいません。その理由はこのヘビの牙に隠されている「ひみつ」にあります。

ヤマカガシは後牙類といい、毒を注入するための牙が口の奥にあります。獲物にしっかりと咬みつき、奥の牙で傷をつけたら、その傷に上あごの奥にあるデュベルノイ腺という毒腺をこすりつけ、毒を流し込みます。そのため、そうとう深く咬まなければならない問題なのです。

元来、ヤマカガシはおとなしいヘビで、自分から襲ってくることはほとんどありません。恐ろしい毒を持っているからと敬遠せず、まず彼

小さな発見—ミュージアムコンパニオン—

らのことを知ることからはじめてみませんか？

(ミュージアムコンパニオン 滝本麻衣子)



カエルを食べるヤマカガシ(撮影:今井初太郎)

博物館でツクバキンランを発見しました！

研究報告 2

ツクバキンランは、筑波山周辺で発見されたことに因んで名づけられた、茨城県にゆかりのある植物です。昨年4月に、この植物が当館の野外にも生育していることを発見しました。ある日、森の中でキンランの花が咲いていたので立ち止まると、そばを通りかかった小さな姉弟に「何を見てるの？」とたずねられました。「これはキンランという珍しい植物だよ。」と教えながら一緒にそっと花びらを開いてみると、その特徴からキンランではなく、ツクバキンランであることがわかったのです。

ツクバキンランとキンランの1番の違いは花びらです。キンランをはじめ多くのランは6枚の花びらのうち、1枚が特別な形をしています。これは唇弁とよばれ、オレンジ色の筋模様が入っていて、多くの昆虫を誘うのに役立っています。一方、ツクバキンランは6枚の花びらがすべて同じ形をしています。キンランの唇弁に相当する花びらにはまったく模様がありません。これは花の進化の先祖返りともいわれています。

ツクバキンランとキンランをよく見ると、ほかにも違いがあります。花の色はツクバキンランがレモン色なのに対して、キンランはオレンジ色がかった黄色をしています。また、ツクバキンランは花があまり開か

ないのに対して、キンランは花がしっかりと開きます。さらに、ツクバキンランの柱頭は上を向いていますが、キンランの柱頭は横を向いています。

ツクバキンランは、これまで茨城県の筑波山周辺を中心に分布していることが知られていました。しかし、県の南部での報告ははじめてです。果たして、県外にも広がっているのでしょうか。当館では、ボランティアのみなさんと、その広がりを調べていきたいと思います。

(資料課 伊藤彩乃)

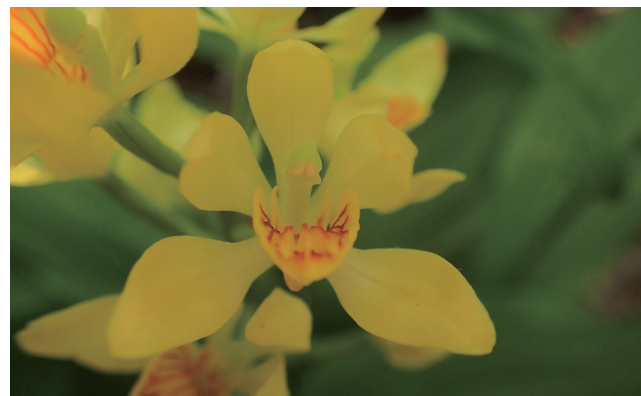
※とても貴重な植物なので、見つけてもむやみに採集しないでください。



ツクバキンランの花(6枚の花びらがすべて同じ形になる)



博物館のツクバキンラン



キンランの花(花びらの1枚がオレンジ色の筋模様のある唇弁となる)

ホウボウ

今回はユニークな姿の魚、ホウボウをご紹介します。その一番の特徴は何といっても翼のような大きな胸びれです。広げると青と緑に彩られて美しく、大変目を引きまします。ホウボウは敵に襲われそうになるとこの胸びれを勢いよく開いて相手を驚かせ、その隙に逃げます。当館の“海の水槽”内には、ホウボウを襲うような魚はいないためこのような使い方はしません。しかし、泳いでいるときには胸びれを大きく広げた姿を

見ることができます。

また、もう1つの特徴として胸びれの下に指のようなものが片側に3本ずつあります。これは胸びれの軟条とよばれるものが変化したもので、その先には味蕾とよばれる味やにおいを感じるセンサーがあります。これで海底の砂の中にあるえさを探すのです。その仕草はまるで海底を歩いているようで、なんだか可愛らしく感じます。ご来館の際は、ユニークなホウボウの姿を観察して

おさかな通信

みてはいかがでしょうか。

(水系担当 佐藤まなみ)



胸びれを大きく広げたホウボウ

恐竜ディノニクスの新しい展示

収蔵品紹介

2018年4月に、第2展示室のディノニクスの展示を更新しました。ディノニクスは白亜紀前期の肉食恐竜で、映画『ジュラシックパーク』シリーズの「ラプトル」のモデルになった恐竜です。これまでの展示では全身骨格のみでしたが、2体の異なる姿の生体復元模型を新たに追加しました。手前側のディノニクスの模型は体表がウロコで覆われていますが、奥側の模型はほぼ全身が羽毛で覆われています。一体どちらの復元が正しいのでしょうか。

実は現在のところディノニクスの化石で体表のようすが分かるものは見つかっていないので、どちらの復

元が正しいのかはまだはっきりとは分かりません。しかし最近では、ディノニクスと近い仲間（ドロマエオサウルス類）であるマイクロラプトルなどの化石で羽毛の痕跡が見つかっています。そのため、ディノニクスにも羽毛が生えていた可能性が高いと考えられるようになりました。

このようなディノニクスの復元に関する考え方の変化をご覧いただくため、「トカゲっぽい」復元の模型と「鳥っぽい」復元の2つの模型を新たに追加しました。この展示を通して、恐竜の復元の面白さを感じていただくと幸いです。（資料課 加藤太一）



模型2体が追加されたディノニクスの展示



マイクロラプトルの化石(レプリカ)

矢印の部分が羽毛の痕跡

チョウとガのちがって？

なるほど博物館 いばレックスとコティランが自然に関する情報をわかりやすくお伝えします。



いばレックス

梅雨があけると、いよいよ夏だね。昆虫の姿も多くなるね。

そういえば…、蝶(チョウ)と蛾(ガ)は、どうやって見分けるの？



コティラン

コティランは、どう思ってるの？

白や黄色できれいなのがチョウで、茶色っぽい地味なのが“ガ”かなあ？

ほかには？

それと…、昼に飛ぶのがチョウで、夜に飛ぶのがガだと思う！

じゃあ、下の写真はどっちがチョウだと思う？

んー。右のほうがチョウだと思う！

ブー。右はニシキオオツバメガといって、アフリカのマダガスカル島に生息するガの仲間だよ。左は、イチモンジセセリというチョウなんだ。

えー！あんなにきれいなのにガなの!?



イチモンジセセリ



ニシキオオツバメガ

ガの中にもきれいな種もたくさんいるんだよ。実は、チョウとガは鱗翅目(チョウ目)というひとつのグループで、はっきりとした違いで区別することは難しいんだ。チョウは、ほとんどの種が昼に活動するけど、ホタルガというガのように、昼に活動するガもいるよ。ほかにも、翅(はね)を閉じてとまるのがチョウ、翅を広げるのがガと言われることもあるけど、それだけ区別することもできないんだ。国によっては、チョウとガを区別する言葉のない国もあるよ。

じゃあ、チョウとガは同じ仲間ってこと？

そういうことだね！

(資料課 中川裕喜)

よくいわれるチョウとガのちがいを

	チョウ	ガ
活動する時間	ほとんどの種が昼に活動する	夜に活動する種が多いが、昼に活動する種もいる
触覚	触覚の先はこんぼう状	触覚の先はとがり、くし形、羽毛状
とまり方	翅を閉じるものが多いが、広げる種もいる	翅を広げる種、閉じたり折りたたんだりする種もいる
日本における種数	約200種	約6500種

日本ではセセリチョウ、アゲハチョウ、シジミチョウ、タテハチョウのなかまをチョウ、それ以外をガとよんでいるよ！



イラスト：ツク之助

トピックス

○幼小ジュニアプログラムの紹介

当館で提供しているさまざまな学習プログラムのなかで、今までは幼稚園・保育所向けであったプログラムを、今年度より「幼小ジュニアプログラム」と名称を変更して、小学校低学年まで実施できるプログラムに改訂しました。プログラムは以下の5種類です。

- ・「森であそぼう」
- ・「ダンゴムシふしぎはっけん」
- ・「落ち葉のお面づくり」
- ・「タネであそぼう」
- ・「はくぶつかんをたんけんしよう」(新)

「はくぶつかんをたんけんしよう」は昨年度から新規作成・実施しているプログラムです。館内を順路どおり見学しながら、クイズを行うプログラムとなっています。幼児や児童の学習に必要な「遊び」の要素を含ませました。提示資料をリングで括ることにより、バラバラにならずにめくるだけでプログラムが実践できるようになっているのが特徴です。

特に雨天時の館内見学などで活用することができますので、団体の見学時にぜひご利用ください。詳しい内容・実施方法などについては当館ホームページをご覧ください。(教育課 相田裕介)



当館職員によるプログラムの試行の様子

○年間入館者数50万人達成!

当館では、開館以来、毎年多くのお客様にご来館いただいております。全国の県立自然史系博物館の中でトップクラスの入館者数を誇っております。

2018年3月30日(金)、2017年度の総入館者が、50万人に到達しました。年間入館者数が50万人を達成したのは、1996年度以来21年ぶりです。

50万人目のお客様となったのは、坂東市からお越しの倉持颯舞さん(6歳)です。おばあさんたちのご来館でした。倉持さんからは、「坂東市から来ました。自然博物館に来るのは2回目です。」とコメントをいただきました。

50万人達成記念式典では、多くのお客様が見守る中、到達見込みを聞き駆けつけて下さった茨城県自然

博物館友の会の助川会長、茨城県自然博物館ボランティアの今村代表とともに、くす玉割りで祝福しました。そして倉持さんには、横山館長から50万人目の記念入館者証、友の会助川会長からオリジナルグッズなどの記念品が贈呈されました。今後もより多くのお客様に楽しんでいただける博物館を目指して、職員一同努力してまいります。(企画課 松浦卓也)



くす玉の下で記念撮影(倉持さん(右から2番目)、横山館長(右端))

○入館料の改定について

県立の公共施設の利用料金について、全県で免除及び割引対象の見直しが行われたことに伴い、今年度から当館の入館料も以下のとおり変更となりました。

【難病患者の無料化】

難病患者の社会参加の機会を拡大するため、指定難病の特定医療費受給者証をお持ちの方は入館料が免除となります。

【県外学校団体の有料化】

県外の学校団体のうち、特別支援学校を除いた、小学校・中学校・高等学校等の児童及び生徒は有料となります。(団体料金が適用されます)

引率者はこれまで通り申請により免除となります。

【70歳以上の方(高齢者)の有料化】

2018年6月12日(火)から有料となります。(一般料金の半額程度となります)

みなさまには大変ご迷惑をお掛けしますが、ご理解のほど、よろしくお願いいたします。

(管理課 青柳裕太)

区分	本館・野外施設		野外施設のみ
	企画展開催時	通常時	
一般	740円(600円)	530円(430円)	210円(100円)
満70歳以上	370円(300円)	260円(210円)	100円(50円)
高校・大学生	450円(310円)	330円(210円)	100円(50円)
小・中学生	140円(70円)	100円(50円)	50円(30円)

※()内の数字は、20名以上の団体料金です。

※県外の学校団体は、児童生徒数にかかわらず団体料金が適用されます。

菅生沼ふれあい橋・あすなろ橋開通



開通式におけるテープカット

菅生沼の東西を結ぶ菅生沼ふれあい橋・あすなろ橋は、菅生沼の自然観察及びあすなろの里と博物館の相互利用を目的として開館当初に設置されました。その後、台風や豪雨の度に毎年のように冠水するなど、20数年の間風雨に晒されてきました。近年は特に木製部の不良箇所が目立ちはじめたため、2017年度から、架け替え工事を実施しました。工事のため橋の一部を通行止めとしておりましたが、2018年3月24日（土）に工事が完成し、晴れて開通することができました。同日には、坂東市副市長をはじめ、常総市教育委員会教育長、水海道あすなろの里常務理事、茨城県教育委員会教育長などたくさんのお客様にお越しいただき、菅生沼ふれあい橋・あすなろ橋開通式を実施しました。

開通後は木製部が全面的に新しくなったため、菅生沼の自然観察や橋を通行するお客様に対してより安



架け替え工事後の菅生沼ふれあい橋・あすなろ橋

全・快適に利用できる環境を提供することができるようになりました。ぜひ来館される際は、橋にも足を運んで菅生沼の自然をご堪能いただければと思います。

当館では菅生沼の環境保全活動に力を入れており、「菅生沼エコアップ大作戦」などを毎年実施しております。菅生沼ふれあい橋・あすなろ橋は、このような活動のためにも不可欠な遊歩道橋ですので、今回の改修は大変有意義なものです。

当館では今後も、さらなる橋の利活用を進めていきたいと考えております。（企画課 松浦卓也）

編集後記

4月から当館に配属され編集を担当しています。社会人として初めて携わったのが長年続くA・MUSEUMの発行であり、嬉しく思うと同時に責任も感じています。多くの人の思いが詰まった博物館の今をお伝えしていけたらと思います。（SF）

【交通案内】



●【車ご利用の場合】

- 常磐自動車道谷和原ICから20分
- 圏央道坂東ICから25分

●【鉄道・バスご利用の場合】

- 東武アーバンパークライン(野田線)愛宕駅下車～茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車～「自然博物館入口」下車、徒歩10分
- つくばエクスプレス、関東鉄道常総線守谷駅下車～関東鉄道バス「岩井/バスターミナル行き」乗車～「自然博物館入口」下車徒歩5分

※事前に発車時刻等をご確認ください。



【開館時間】

9:30から17:00まで

(入館は16:30まで)

※ペット、遊具、テーブル、椅子及びテント等のお持ち込みはご遠慮ください。

次の日は入館料が無料です。

- 5月4日(みどりの日)
- 6月5日(環境の日)
- 11月13日(茨城県民の日)
- 3月21日(春分の日)
- 高校生以下の児童・生徒は毎週土曜日(ただし、春・夏・冬休み期間中を除きます。)
- 高齢者(70歳以上)1月、4月、7月の第3土曜日9月15日～9月21日(老人週間)(ただし、休館日を除きます。)

【休館日】

- 毎週月曜日
- ※7月16日(月)、9月17日(月)、9月24日(月)は開館し、翌日が休館となります。
- ※6月18日(月)～6月23日(土)は館内整理のため休館となります。
- ※8月13日(月)は開館します。

自然博物館ニュース A・MUSEUM(ア・ミュージアム)

企画・編集:ミュージアムパーク茨城県自然博物館企画課/発行2018年6月15日
〒306-0622 茨城県坂東市大崎700番地 TEL.0297-38-2000 FAX.0297-38-1999
URL <https://www.nat.museum.ibk.ed.jp/>
E-mail webmaster@nat.museum.ibk.ed.jp

Facebookもチェック



ミュージアムパーク茨城県自然博物館友の会
入会すると入館料が無料に！(年会費)

家族会員 4,000円 個人会員 3,000円
子ども会員 1,000円 賛助会員 10,000円
※特典 イベントへの参加、ショップ・レストランでの割引

ミュージアムパーク茨城県自然博物館は、誰もが親しめ、誰もが楽しめるア・ミュージアム(アミューズメント+ミュージアム)をめざしています。